1 月 23 日に横山氏が小平潟天神附近から翁島方面に飛翔している 18 羽を確認している。

休息・採餌の場所は湖面の北岸小平潟天神～三城潟附近でこの附近は遠浅が続き湖底が泥土であるところから、小魚介類や水草類・モ類が多いと思われる。ここを中心に西方長浜・翁島方面と、東方磐城西線上戸駅寄りの志田浜（遠浅で砂地）方面に交互飛翔を続けているようである。尚湖岸が凍結した場合とか、積雪の多い時等は志田浜附近の人家で流した残飯等を湖岸迄来て採餌しているそうである（志田浜田村屋旅館大山一郎氏談）。又時々心ないハンターに鈍口を向けられる為か、200 米も接近すれば飛翔してしまうようであるが、渡来したばかりの群には 100 米位迄接近することが出来るという（佐藤氏報告）。

この湖水面一帯は国設禁猟区となっている為、猟をすることは出来ないが、湖岸は区域外の為休息中のカモ類等は時折銃獲されるようで（佐藤・大山両氏報告）、今後の大白鳥保護の為にも湖岸 1 軒位は是非禁猟区の区域内に入れる必要があると考える。鉄砲を撃ったり驚ろかしたりしない限り、新潟県瓢湖の大白鳥のように年々大群の飛来を見るようになるものと思われる。

その外猪苗代湖にはカモ類が多く飛来し、冬季は常時 300 羽前後の群を見ることが出来る。その種類はマガモ・キンクロハジロ・トモエガモ（大群）・ハシビロ（少数）・ヨシガモ・コガモ・オシドリ（少数）が群棲している。この他アイサ類も渡来している。

この外今冬大白鳥の飛来した個所（内陸のみ）は郡山市麓山上水池に 3 羽（2 月中旬）会津若松市南町附近の湯川に 1 羽（3 月上旬）である。又太平洋岸の磐城海岸では 6 羽の大白鳥が銃獲されている。監視の強化もさることながら猟鳥以外には絶対に発砲しないよう強く要望したい。

附 記 その後著者から昭和 35 年度は 10 月 27 日 8 羽、11 月 23 日現在すでに 50 羽以上となった旨御連絡があった（編集者）。

A few Whooper Swans had been occasionally reported to winter, among flocks of ducks, at inland Lake Inawashiro, 514 m. from the sea-level, in Fukushima. But the winter, 1959-60, was marked in having been recorded the January maximum of 58 birds. In November, 1960, again 50 birds have already been reported.

九州の白鳥 A report on swans from Kiushiu. 倉成栄吉 Eikichi Kuranari

荒崎の鶴保護地に渡来していたオオハクチョウが、昭和 10 年頃行われた耕地整理の為になくなった後（下村兼史 1955）は、九州に白鳥の滞留地は知られていない。

所が、昭和 34 年 11 月から、九州に白鳥が 4 羽も渡来し、その 2 群は今 2 月尚滞留越冬中である。しかもハクチョウがその 3 群に確認される事は注目に値する。併せて、従来の九州の白鳥渡来例と今冬山口へ渡来の白鳥につき略記した。

従来白鳥渡来例： 貝原益軒の筑前続風土記 (1709) に「鶴 (はくちょう) は所々の池に棲む」とあり、当時は北九州に普通に見られた事が判る。

- 1) 鹿児島県荒崎 昭和のはじめ迄オオハクチョウ数羽が渡来越冬。1928 年の写真あり。
- 2) 博多湾今津 大正 7 年 11 月、オオハクチョウ。
- 3) 博多湾 大正 13 年 11 月 11 日オオハクチョウ幼鳥 1 羽、安部剝製。
- 4) 佐賀県大詫間 大正 15 年 2 月オオハクチョウ。
- 5) 筑後川尻福岡県沖端村 昭和 6 年 10 月 10 日オオハクチョウ 1 羽確認、同 15 日佐賀県早津江へ飛去。川口孫治郎。福岡県天然記念物報告。
- 6) 福岡県福岡海岸 昭和 9 年 4 月オオハクチョウ。剝製。
- 7) 久留米市筑後川 昭和 22 年 4 月オオハクチョウ。豆津橋附近北岸寄 2 白鳥写真あり。
- 8) 宮崎県 ハクチョウ。鳥類目録 4 (野鳥 13 (5))。
- 9) 佐賀県伊万里湾 昭和 25 年頃白鳥 7 渡来し 3 撃たれた由 佐賀県文化財専門委員 関屋国英氏に聞いた。
- 10) 対馬 オオハクチョウ。鳥類目録 4。

1959～60 年冬渡来の白鳥： 1) 博多湾今津附近 ハクチョウ 2 羽、オオハクチョウ 2 羽。昭和 34 年 11 月 25 日夕鴨猟中の歯科医、福岡鳥の会山道昌英氏発見、26 日県治山課狩猟担当官で福岡鳥の会員の藤田芳夫技師同行し銃猟禁止の札を立てた。西日本新聞写真班も之に同行撮影し、その写真を掲げてこの事が 27 日の同紙に報ぜられた。写真には離水刹那の成鳥幼鳥各 2 羽が鮮かに撮れている。然るに、その幼鳥 1 羽は 26 日夕、既に、隣接の元岡村太郎丸池で密殺されていた。福岡動物園にはその剝製が現在している。太郎丸池には翌 27 日と 29 日に白鳥 1 羽が飛来して伴を求めて浮んでいたが、この日を最後に、この地区から姿を消した。残る 2 羽も散弾を浴びたとも伝えられる。この白鳥は新聞ではオオハクチョウと報ぜられ、剝製の幼鳥もオオハクチョウであったが、写真の 4 羽には疑点を感じ、又後記佐賀の白鳥がハクチョウであったので新聞社の写真を借りて黒田長久博士の御高教を願った所、成鳥 2 羽は明らかにハクチョウ、幼鳥 2 羽はオオハクチョウと御回示を得た次第である。

2) 佐賀県多久市 ハクチョウ。多久市笹原の木全マサエ 16 歳と 2 弟は昭和 34 年 11 月 13 日近くの畑にいたという銃弾に傷ついたハクチョウの成鳥を助けて養っていた。偶々、今津の白鳥事件からこの事が知れ、初め、今津の負傷鳥と思われる、香川福岡動物園長と 藤田技師は 12 月 12 日に之を福岡動物園に収容した。引取に行かれた時集った土地の人は、当時、同地で白鳥 6 羽南飛を見たと言ったという事である。木全マサエさんに抱かれたこの白鳥の写真は各新聞と週刊文春 1 月 18 日号にも載ったが明白にハクチョウである。写真は修整という事もあるので、念の為動物園に尋ねた所、園長も帰って調べたらハクチョウだったと云っておられるとの返事であった。幸らしい。

3) 宮崎県佐土原 オオ

ハクチョウ。佐土原町上田島巨田池には昭和 34 年 11 月下旬に、鴨に混って 6 羽の白鳥が渡来した。12 月 9 日その 1 羽がイタチワナで傷ついたので、佐土原小学校に預けられた、津田進事務官中心に養護している。他の白鳥は姿を消した。以上は 34 年 12 月 13 日朝日新聞 13 版の伝えた要旨であるが、新聞写真は幼鳥で不鮮明であった。筆者は、津田事務官に照会した所、写真、顔と嘴のスケッチを添え、新聞の通り 12 月 12 日県の指定により預り、糠に靱を混ぜた餌を約 1 月差餌、正月 6 日漸く独餌となった。翼長約 50 ㎝、羽毛暗色、体重 2 貫に回復のこと。野外にも尚朝夕 4 羽程の白鳥の飛行を認める旨の 1 月 19 日附返信を得た。之によりオオハクチョウと知ったが、更に黒田博士の御示教を得た。

4) 福岡県小郡町一佐賀県基山町地区 ハクチョウ 6 羽。福岡県小郡町三沢ハイキングセンターは佐賀県東端基山町の筆者宅から東に抜がる約 3 ㎞四方の松林、砂丘、池沼からなる低い丘陵地帯で、中央に黒岩稲荷と、5 個の池が集っている。3、4 年前迄は池は旧藩時代から続いた鴨猟場で、23 年にはオースチン、黒田博士も視察された所であるが、今はバンガローが並び、遊歩道を回らしている。夏はボートも浮ぶ一番下段の池に、昭和 34 年 12 月 23 日、6 羽の白鳥が浮んだ。管理人の板並氏の通報で、藤田技師が視察、その指導で直ちに禁札が立てられ監視が強化された。西日本新聞 24 日夕刊の「こんどは撃たないで」という見出しで筆者はこの事を知った。翌 25 日未明、淡雪の池畔に立つと、水音を立てて数羽の鴨が舞いたった。その方に眼をやると長い頸をマストの様に立てた 6 羽の白鳥が白々と並んでいた。潜に近づくくとククと呟き乍ら、池心へ泳いで行く。2 羽は白く、顔は黄味をおびて見え、後 4 羽は羽毛は煙褐色で顔先は白く、一周り小さい。成鳥は幼鳥の前後を庇う様な行動で 1 家族の様に見えた。この朝通路には縄が引かれ制札があったが、翌朝は制札もペンキ塗となり数も増えた。

白鳥は 30 日から正月 2 日迄は 1 ㎏西、拙宅から 4、5 分の佐賀県にまたがる伊勢浦池にいた。元日には屠蘇機嫌の大声に飛立つのを筆者も見したが、基山の初売の花火には余程驚いた様で、5 日迄両池共姿を見なかった。6 日朝漸く鴨池に帰来。7～8 日は朝去り夕帰来。8 日からは再び鴨池に落付いて、池面の飛行さえ殆んど見られない。正月の不在期には東北 2 ㎏の鴨猟場井ノ浦池にしばしば見られ、東方 4 ㎏の干潟の大池にも行った事が知れている。鴨池には一隅に睡蓮と菱を見る丈だが、白鳥には煮た甘藷が与えられている。

2 月 4 日 ゴトウ式望遠鏡を借りて、観察すると、成鳥の眼先の橙黄色は、2 羽共、鼻孔の手前に止っている。幼鳥 2 羽は嘴の黒部が完成し、後 2 羽も眼先裸出部との境は画然としているが、白ッポくて、ホノかに黄色を帯びたこの裸出部は 4 羽とも同形で、鼻孔下に達していない。即ち、この 6 羽はハクチョウと判断される。尚、成鳥の 1 羽は他より鼻部の隆起や、顔の黒と黄の境界線が複雑である。渡来後 60 日近い今日、成鳥と幼鳥の大きさの差が眼立たなくなった気がする。又、常に密集しすぐ長い頸を林立さ

せて警戒したのが今はスクーターの爆音も平気で、次々と逆立ちして、白い尻と黒い脚を水面に林立させたり、渚で佇立する事も多くなった。主監視員は、元地許三国村々長山村儀平老だが、警察官上りで適任者である事は悦ばしい。次第に増える観覧者の態度も極めてよく、今津の犠牲に対する世論の盛上りが大いに与っている事が現場にいてよく判る。 5) 山口県萩市 ハクチョウ。35年2月4日朝7時頃、萩市西の浜附近に白鳥 10羽飛来9時頃西飛。又々10時頃、別群らしい8羽が同市玉江川畔に降り午後に至るも飛ばなかった。以上は防長新聞2月5日記事の要旨として、山口博物館三宅貞敏氏から教示をうけたもので、種名不詳、九州外乍ら附記する。

おわりに： 今冬の白鳥ブームについて思い合ふのは、キクイタダキやツグミの渡来が珍しく多く、荒崎にソデグロヅルも来た事等で、何か共通なものがあるかも知れない。なお多久市と三沢は何れも渡り鳥の通路で、三沢地区の鴨は有明海と往来すると信ぜられている。末尾乍ら、御高教と御便宜を与えられた黒田博士を初め、西日本新聞、藤田技師、山村儀平氏、中村清彦氏に謝意を表し、白鳥の無事を念じてペンを描く。

引 用 文 献

下村兼史 荒崎の鳥 鳥 14(66), 1955

安部幸六 福岡県内に於ける珍重すべき野鳥 福岡県文化財報告書 18(昭 30)

清棲幸保 日本鳥類大図鑑

清棲幸保 原色日本野鳥生態図鑑

小林桂助 原色日本鳥類図鑑

黒田長久 九州鳥信 野鳥 13(5), 1948

The following swan records in Kiushiu for the winter, 1959-60, are reported: 1) Four swans (two adult Whistling and two young Whooper swans) were observed at Imazu, Hakata Bay, Fukuoka, 25 November, 1959. 2) A wounded Whistling Swan was found in Taku City, Saga, 13 November, 1959 and six others were observed. 3) Six swans (one Whooper Swan captured) from Sadowara, Miyazaki, end of November, 1959. 4) Six Whistling Swans (four were young) visited Ogori, Fukuoka, 23 December, 1959. Beside Kiushiu, 5) Two flocks of 10 and 8 birds were observed in Hagi City, Yamaguchi, 4 February, 1960. It is to be added that rarer Whistling Swans occurred at three places in Kiushiu. Ten more previous swan records known from Kiushiu are also given.

追記： 1. 福岡県小郡町のハクチョウは2月25日夜迄滞在無事帰北した。早かったのは、福岡の最高気温が24日16.1度、25日21.7度、26日22.1度と異常高温だった為かも知れない。 2. 佐土原の白鳥は別に1羽斃死。巨田池の白鳥は3月5日現在2羽の冒津田氏から受信した。(3.10)